

NHK海外たすけあいキャンペーン

新型コロナウイルス感染症の影響により、私たちの生活が大きく変化する中、貧困層や脆弱な状況にある人々はより深刻な影響を受けています。加えて今なお続く紛争や世界的に見ても増加し激化する自然災害により、「紛争＋感染症」、「災害＋感染症」といった複合的な人道支援を行っていく必要があります。

このキャンペーンでいただいたご寄付は、海外の武力紛争、洪水や干ばつ、感染症の急激な蔓延などで苦しんでいる人たちのために、救援物資や医薬品の配布、衛生設備の配備、ボランティア体制の構築など幅広い活動に活用されます。

募金受付期間 **12月1日(水)～12月25日(土)**

受付方法 窓口(現金) NHK大分放送局、日赤大分県支部、各市町村の赤十字窓口
銀行振込 大分銀行、郵便局、JA、JFの各支店



JRC活動推進校(明野しいのみ保育園)

日赤大分県支部では、毎年20校(園)の青少年赤十字活動推進校(園)を指定し、青少年赤十字の実践目標である「健康・安全」「奉仕」「国際理解・親善」をもとに行っている活動に対して、2万円の助成を行っています。

写真は活動推進校である明野しいのみ保育園が、「花いっぱい運動」として、地域の道路に面した花壇に花の苗を植えたり、近隣の公園の清掃活動を行ったりしている様子です。

その中で、助成金は花の苗や土、清掃用具の購入に使われました。

他にも社会福祉施設への訪問の際に渡すプレゼントの制作費や、心肺蘇生を学ぶための教材費に使っている学校もあり、助成金は県内での青少年赤十字活動の活性化に役立っています。



赤十字のボランティアってどんなことをしているの？

日赤大分県支部では、赤十字を支援していただけるボランティアを募集しています。今回、大分県赤十字安全奉仕団の一員として活躍しているお二人に、赤十字のボランティアについて教えていただきました。

大分県赤十字安全奉仕団とは、救急法・幼児安全法・水上安全法の指導員資格を有する者によって組織され、各講習の技術をもって、地域社会に奉仕することを目的とする奉仕団です。

鎌田伸一指導員 (向かって左)

子どもの事故防止のためにと受講した救急法をきっかけに、2003年に救急法指導員の資格を取りました。その後2010年に水上安全法、2015年に幼児安全法と現在3つの指導員資格を取り、安全奉仕団の一員として活動しています。

「受講してくださった方が、学んでよかったと言ってくださることが嬉しいです。これからも多くの人に伝えていきたい。」とのこと。

長身と優しい笑顔、ユーモアを交えた指導で、赤十字の講習普及活動を支えてくださっています。



松村真志指導員 (向かって右)

職場で急病人の対応等をする必要があり、詳しく知りたいと受講した救急法をきっかけに2007年に救急法指導員の資格を取得しました。

「講習を通じて県内のあちこちに出向き、たくさんの人と関わることが嬉しいです。これからは後継者を育てる側になって若い指導員の手本になりたいです。」とのこと。

親しみやすさと丁寧な指導、安全奉仕団の事務局として、大分県支部を支えてくださっています。

臼杵市、日田市、津久見市、豊後高田市に災害用資機材を贈呈しました

赤十字の事業を各地域で行うために、各市町村に赤十字窓口を設けています。

日赤大分県支部では、毎年、県内の赤十字窓口から希望を募り、災害用の資機材を整備しており、令和3年度は臼杵市に TENT を、日田市・



豊後高田市に整備した救援車両

津久見市に倉庫を、豊後高田市に救援車両を整備しました。これらの資機材は災害の時はもちろん、各地で行う防災セミナーなどでも活用されます。皆さまからいただいたご寄付を、地域の防災・減災のために役立てています。



津久見市に整備した倉庫



市町村に整備しているテント (写真は令和2年度に由布市に整備したもの)

高額寄付者(社)のご案内 (令和3年8月～10月まで)

日赤大分県支部に多額の事業資金をお寄せいただいた方を掲載しております。(敬称略・順不同) ご協力、誠にありがとうございます。

▶大分市 首藤 恭子 丹羽 和美 三浦 マサコ B・F・Cコーポレーション株式会社(美容室B・F・C姫)
▶佐伯市 三浦造船協力事業協同組合 大電工業株式会社 佐伯ポートサービス有限会社

▶別府市 松田 美代子
▶竹田市 井上 寛之

大分赤十字病院 ～新型コロナウイルス感染症との闘い～

当院における感染予防や感染者の受け入れに備えた体制づくりは、感染管理認定看護師である鎌田善子師長に求められる役割です。院内感染対策チーム(ICT)のメンバーとして、当初より体制を整備し活動してきました。



発熱症状等がある方専用のコンテナでは、防護服を身に纏い、患者さんの対応をしています



コンテナで対応する医療スタッフ (左から2番目が鎌田師長)



入院患者さんが過ごす病室 (左奥にあるのが陰圧装置)

鎌田師長の話

新型コロナウイルスの感染が日本で広がり始めた頃から、PCR検査の導入、ゾーニング(区域分け)の見直し、マニュアルの改訂と周知、感染対策の確認と指導等、感染管理者として、院内を走り回る毎日でした。コロナ患者さんの入院受け入れは予想以上に過酷です。経過も長く、中には厳しい状態の方もいらっしゃいます。でも、時間がかかっても元気になって退院される患者さんをみると、良かったと思えます。大分赤十字病院がこれまでなんとか患者さんの受け入れを続けられたのは、直接対応するスタッフだけでなく、すべての病院スタッフが一丸となって頑張ったからです。これからも感染との闘いは続きますが、立ち止まることなく活動していきたいです。